

仮名字母の出現傾向から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け(1)

—書陵部蔵三条西家本、保坂本、大正大学本を中心とした写本との比較を通して—

齊藤 鉄也

一 はじめに

古典籍に特徴的に出現する変体仮名の出現傾向は、書写年代や書写者によって影響を受けると考えられるが、その詳細は不明である。稿者はこれまで、変体仮名の字母の出現傾向を統計分析することで、写本の書写者の推定や、同一書写者による写本の年代推定ができる可能性を指摘してきた。写本本文に大量に存在し、調査し易く、平安時代から江戸時代まで長期間に渡って存在する変体仮名を比較分析することで、書写者や書写年代に関する知見が得られるのであれば、書誌情報とは異なる根拠に基づいて、書誌学や文献学の知見の蓋然性の向上や、写本に関する新たな仮説の提案が可能であろう。

紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』[1]は、その「夢浮橋」の奥書により、三条西実隆によって書写された源氏物語写本を、明応四(一四九五)年とそれ以降の、少なくとも二度転写されたと考えられている写本である。本稿では、写本本文に出

現する仮名字母の出現傾向の点から、この紅梅文庫旧蔵本を、明応四年に近い時期に書写されたと考えられる源氏物語を中心とした写本と比較し、この奥書の記述を裏付ける根拠を探索した結果を報告する。

調査結果からは、今回調査対象とした写本には、紅梅文庫旧蔵本の中に、明応四年に近い時期に書写された三条西実隆筆の可能性がある写本と、仮名字母の出現傾向に近い写本が存在する可能性は低いことが明らかになった。現段階では、紅梅文庫旧蔵本の少なくとも二度の転写によって、仮名字母の出現傾向に実隆筆写本の影響が残っている可能性は低い、と言える。

尚、以下、本稿では、源氏物語写本の名称を、紅梅文庫旧蔵本は紅梅本、書陵部蔵三条西家本は書陵部本、日本大学蔵三条西家本は日本本と略す。

二 本調査の目的と関連研究

本調査の目的は、紅梅本の中に、実隆筆写本と似た仮名字母の出現傾向を持つ写本の存在を確認することである。特に、文明年間(一四六九—一四八七)に近い時期に書写された実隆筆写本と仮名字母の出現傾向が似た写本が紅梅本の中に存在すれば、奥書の記述とは別に、紅梅本が文明年間に書写された実隆筆の源氏物語写本との関係がある可能性を指摘でき、紅梅本の位置付けを補強することができる可能性がある。

写本本文の仮名字母の出現傾向は、本文の意味に影響を与えないこと、また、仮名字母の出現傾向の集計や処理方法が不明であることから、その調査報告が乏しく、知見も得られていなかった。そのため、これまで調査対象として取り上げて論じることが困難な存在であった、と言える。この課題に対して、稿者は、文章の特徴を数値化したデー

タに対して統計手法を用いて分析する、文献学の一分野である計量文献学の方法論を古典籍に適用して、調査することを試みている。近年の写本の出版やインターネット上での画像公開の進展により、本文データの収集が相対的に容易になりつつある。このことを利用して、写本に出現する仮名字母の頻度を集計し、統計手法を用いた分類をするこ
とで、写本の書写者や書写年代の推定ができる可能性を指摘してきた[2] [3]。

その調査では、最初に二つの写本本文の仮名字母の出現傾向を数値化し、それらの写本間の数値の相違から「距離」を計算する。最終的に調査対象とする全写本間の距離を計算し、その結果に基づいてグループに分類する手法を用いている。これまでの調査結果からは、仮名字母の出現傾向は、同一人物による書写(以下、同筆とする)された写本や、同筆の場合であれば書写年代が近い写本は、互いに写本間距離が近いグループを構成し、出現傾向が似ていることが明らかになっている。本稿に関係する日大本を中心とした、伝承筆者を含む三条西実隆、公順、公条、実枝筆の80写本の調査結果[3]からは、実隆筆写本は、

- (1) 「花宴」を除く日大本の写本は、その写本間距離が互いに近いこと、
- (2) それ以前に書写されたかとされる伝実隆筆を含む和歌集や歌論、物語の写本に関しては、距離が遠いこと、
公条筆写本は、
- (3) 互いに写本間距離が近いこと、
- (4) その中でも大永五(一五二五)年と享祿三、四(一五三〇、一五三一)年の書写奥書のある写本をグループに分類できる可能性があること、
公順と実枝による写本は、
- (5) 互いに写本間距離が近いこと、

- (6) 公順筆「胡蝶」は書陵部本「篝火」と相対的には写本間距離が近いこと、を指摘した。また、日大本と紅梅本の比較結果「4」からは、
- (7) 日大本と紅梅本の写本は互いに距離が遠いこと、
- (8) 紅梅本は一つのグループを構成すること、
- を明らかにした。これらの調査結果から、仮名字母の出現傾向に基づくこと、実隆筆写本に関しては、日大本に書写奥書のある時期の写本とそれ以外の写本で分類できる可能性があること、紅梅本に関しては、同筆の可能性があること、を指摘した。加えて、公順筆「胡蝶」の奥書の記述「此卷古本欠愚筆ノ本也」と書陵部本「篝火」の写本間距離の近さと、「篝火」の推定書写年代（四八九—一五〇六）に基づくと、書陵部本の書写年代に近い時期の実隆筆写本は分類できる可能性を指摘した。

つまり、仮名字母の出現傾向の似た写本は、同筆の写本の可能性があることと、筆跡その他の点から他筆であったとしても、書写者と関係がある写本の可能性があること、を指摘することができる。そこで、本調査では、本文の仮名字母の出現傾向を用いて、(1)書陵部本の推定書写年代に近い時期の実隆筆写本と距離の近い写本の探索、(2)この時期の実隆筆写本と距離の近い紅梅本の写本の存在を確認する。これにより、紅梅本の中に、明応四年に近い時期の実隆筆写本と距離が近い写本が存在すれば、奥書の記述とは異なる根拠によって、その記述の蓋然性を高めることができる可能性がある。

三 調査対象とした写本と本文データ

調査対象とした巻は、源氏物語に関しては、第一帖「桐壺」から第二十七帖「篝火」とした。後続の巻の写本の調査は今後の課題とし、続稿で報告する。調査対象とした写本は、「蓬生」を欠く紅梅本二十六写本と、明応四年に書写年代が近い写本である、書陵部本と大正大学本のそれぞれ二十七写本と、保坂本のうち、永正年間(一五〇四—一五二二)頃の書写かとされる室町時代に補写された「桐壺」から「絵合」までの十七写本、長享二(一四八八)年の実隆筆との奥書がある高松宮家本「松風」、仮名字母の出現傾向が似ている日大本の公順筆「胡蝶」、明応六(一四九七)年書写の天理図書館蔵の実隆筆『新撰菟玖波集』、伝実隆筆である書陵部蔵三条西家本『和泉式部日記』とした。

調査対象に用いた、稿者が作成した本文データは、写本本文と同一の仮名字母、行数、改行位置を持つ。調査対象文字数は、これまでの調査[2][3]から、仮名字母の出現傾向は少なくとも二千五百字以上、多くともおおよそ五千字以上あれば十分であることが明らかになっているので、五千字以上を目安として調査している。

本調査で用いた計百一写本とその本文データの集計結果を本稿末に表一としてまとめた。表一では、写本名と源氏物語であれば巻数、調査対象とした仮名字母数を文字数、調査対象文字数中に出現した仮名字母数を字母数として表している。それぞれの写本の出典は、本稿末にまとめた。

四 調査手法

本調査では、異なる巻や異なる作品を比較することを想定し、特定の仮名字母ではなく本文に出現する全仮名字母

を対象としている。そのため、仮名字母を統一した方針で収集する。具体的には、

- (1) 傍記を除き、本行本文を対象とする、
- (2) 一音の漢字は仮名と見做す、
- (3) 出現する仮名字母を集計し、同音の字母の相対頻度を求め、これを「仮名字母の出現傾向」と見做す、
- (4) 「仮名字母の出現傾向」に対して、統計手法を用いて分類する、

ここで写本の分類に用いた統計的手法は、「正しい」分類結果が知られていないデータに対して、データの特徴だけに基づいてグループに分類する「教師なし分類」と呼ばれる手法である。具体的には、主成分分析と階層的クラスター分析を用いる。分類した結果の図では、仮名字母の出現傾向の類似した写本が、数値で表された写本間の位置や距離に基づき近接して配置される。主成分分析では散布図として、階層的クラスター分析では樹形図として、分類結果を表すことができる。

五 調査結果

ここでは、最初に、写本間関係を概観するために主成分分析を、次に、写本間関係の詳細を検討するために階層的クラスター分析を用いて可視化し、分類結果を検討する。

五・一 主成分分析に基づく写本の分類

最初に調査した写本間関係を概観するために主成分分析の結果を示す。手法の概要は注一として本稿末にまとめた。

この結果を図一(カラー口絵参照)に表す。

図一からは、右の小さい楕円の位置に紅梅本の写本が桃色で配置され、他の写本と分類されている。それ以外の写本に関しては、左側に位置する四つの楕円に分類されているが、それらの楕円は重なり、その詳細を考察することは困難である。これまでの仮名字母の出現傾向の調査結果においても、主成分分析の結果は、同筆とされる写本に関しては分類されるが、同時期の書写者が存在すると考えられる写本においては、密集して配置され、その結果の解釈は困難な結果となっている。

五・二 階層的クラスター分析に基づく写本の分類

次に、写本間関係の詳細を検討するために階層的クラスター分析の結果を示す。手法の概要は注二として本稿末とめた。階層的クラスター分析は探索的な手法であるため、その写本間距離と写本のグループ構成の計算方法によって異なる分類結果となるが、互いに距離が近い写本の場合はその関係に変化がないことが多い。この結果を図二(カラー口絵参照)に表す。

図二では、巻を示す文字列に、写本名に加えて、実隆筆写本の場合は(伝承)筆者と書写年代を加えた。図を用いて分類するために、写本をグループに分類する距離を2として点線を引き、参考値として1と1.5にも点線を引いている。これは、この点線より距離が近いグループを同筆の可能性がある写本として検討するためである。距離の値の選択は、調査対象の分野の知識に基づいて決定される。これまでの同様の手法を用いた調査結果に基づく、同筆写本は距離2以下でグループを構成することが多い結果が得られているので、ここでも採用している。図中では距離2以下で群を構成する写本を色づけし強調して表している。より距離が近い位置でグループを構成するほど、それらのグループ

を構成する写本の仮名字母の出現傾向が似ている、と言える。

図二からは、下部に桃色で強調された紅梅本がグループを構成していることが明らかである。また、このグループに属さない紅梅本はこの周辺に位置している。具体的には、このグループの下に「花散里」と「関屋」が、この上に「篝火」が位置している。これらの写本は共に本文が千五百字程度と短いという共通点がある。

奥書より実隆筆を転写していると考えられる日大本「胡蝶」と実隆筆とされる高松宮家本「松風」は、紅梅本の一つ上に緑色で強調されたグループを構成している。これらの写本と写本間距離が近い写本として、書陵部本「帚木」が同一のグループに分類された。これに対して、書陵部本「篝火」は実隆筆であるが、このグループに分類されていない。加えて、伝実隆筆とされる「和泉式部日記」も同様に、このグループとは遠く位置する結果となった。

これ以外の色づけして強調された群の中には、同じ一揃えの写本である書陵部本内でグループを構成するだけではなく、異なる一揃えの写本間でグループを構成する場合もあることが明らかになった。同じ一揃えの写本内で、写本間距離が近いグループは同色で強調している。その例として、図の一番上に位置する水色で強調された書陵部本「初音」と「螢」がある。また、赤色で強調した、異なる一揃えの写本間でグループを構成する例として、上から五番目に（上から二番目に赤色で強調された）グループを構成する書陵部本「桐壺」と大正大学本「空蟬」がある。

六 考察

調査結果に基づき、(1)明応四年に近い時期の実隆筆写本と距離の近い写本の探索と、(2)この時期の実隆筆写本と距離の近い紅梅本の存在を確認する。

六・一 明応四年に近い時期に書写された実隆筆写本と距離の近い写本の存在の有無

図二の階層的クラスター分析の結果より、写本間距離が近いグループを検討すると、今回調査した写本の中には、書写者が明らかな写本と距離が近い写本や、伝承筆者を同じくする写本、これまで共通点が指摘されていなかったが距離が近い写本からなるいくつかのグループの存在が明らかになった。

具体的には、実隆筆写本と距離が近い写本として、書陵部本「帚木」がある。この写本の伝承筆者は実隆ではないが、仮名字母の点からは、実隆筆写本と良く似た写本と考えられる。仮名字母の出現傾向に基づく写本間距離は、近親者や周辺の人物による写本も、その距離が近くなる可能性^[3]があり、仮名字母の出現傾向だけで同筆と判断することはできず、筆跡の比較といったさらなる調査が必要である。仮に、この「帚木」の結果が実隆筆写本との関係を示しているとする、「実隆公記」にある「青表紙正本」の記載との関係性の検討^[5]といった、興味深い問題を提起する結果となったと言える。

伝承筆者を同じくする写本としては、書陵部蔵本「桐壺」と大正大学本「空蟬」がある。これらの写本間距離は近く、共に近衛政家筆とされる写本である。仮名字母の出現傾向からだけから見ると、他の調査に基づいた同筆とされる写本間距離²よりもさらに近い。

この他の同色で強調した写本のグループは、同じ一揃えの写本の中で、仮名字母の出現傾向が似ている写本が存在することを示している。加えて、赤色を用いて、これまで共通点が指摘されていなかったが、仮名字母の出現傾向が似ている写本が、異なる一揃えの写本に存在することも示している。仮に、これらのグループの中に同筆の写本が存在するならば、同時期の書写であることに加えて、同一人物が参加して書写された写本の可能性の指摘ができる。この点で、書陵部本、大正大学本、保坂本には共通の書写者が存在する可能性がある、と言える。

六、二 実隆筆写本と距離の近い紅梅本の写本の存在の有無

調査した全写本を概観した図一と、その詳細を示した図二の結果からは、実隆筆の可能性がある写本と紅梅本は写本間距離が遠く、それぞれ別のグループを構成することから、現段階では、紅梅本の写本の中に実隆筆と近い写本は存在しなかった、と言える。明応四年に近い時期に書写された実隆筆かと考えられる一部の写本は、公順筆の日大本「胡蝶」を含め、グループを構成している。このことから、同時期に書写された実隆筆写本は互いに似た仮名字母の出現傾向を持つ可能性があると考えられる。仮に、紅梅本の中に実隆筆写本と仮名字母の出現傾向が近い写本が存在したとすると、この写本グループと距離が近い結果となる可能性が高い。しかし、今回の調査からは、実隆筆写本と距離が近い写本は存在しなかった。この結果からは、紅梅本の少なくとも二度の転写によって、仮名字母の出現傾向に実隆筆の影響が残っている可能性は低い、と言える。

加えて、紅梅本は、これまでの調査結果に基づく、同筆の可能性がある写本がグループを構成する写本間距離²と比較して、2以下で互いに距離が近くグループを構成することから、同筆である可能性を指摘できる^[4]。このうち「花散里」「関屋」「篝火」は、その他の紅梅本と距離が相対的に遠い。これらが他の紅梅本とグループを構成せず、距離が相対的に遠い原因は、仮名字母の出現傾向が異なるために距離が遠いのか、それとも本文が短く仮名字母の出現傾向が偏っていることにより距離が遠いのか明らかではない。

七 まとめと今後の課題

奥書とは異なる根拠に基づいて紅梅本を位置付けるために、同時期に書写されたと考えられる源氏物語写本の本文

の仮名字母の出現傾向に着目して、複数の写本との比較を行った。その結果、紅梅本の中に、明応四年と近い時期の実隆筆写本と距離が近い写本を発見することはできず、仮名字母の出現傾向の点からは、実隆筆であることを示すことはできなかった。今後の課題としては、(1)今回調査対象とした源氏物語写本の二十八帖から五十四帖まで、同様の調査を行うこと、(2)表記の異なる点から紅梅本を調査すること、である。(1)に関しては、続稿において報告する。(2)に関しては、紅梅本と今回の調査対象とした写本の仮名字母からは、奥書を裏付けることはできなかったため、表記の異同から、紅梅本を位置付けることを試み、別稿において論じる。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP19K00349の支援により実施された。

注

(1) 主成分分析では、似た出現傾向を持つ字母や全く出現しない字母、互いに相関係数が大きい二つの字母のうちの一つを削除し、計99字母を調査対象とした。主成分の計算方法として相関行列を用いた。加えて、主成分分析の二次分析としてk平均法を用いた非階層的クラスター分析を行って、グループに分類した結果を図示している。

(2) 階層的クラスター分析では、写本間距離と、写本をグループに構成する、二つの計算方法を用いる。写本間距離の計算方法としてIR距離^[6]を、グループを構成する計算方法として最長距離法を用いた。最長距離法では、グループに所属する写本を新しく追加する際には、既にグループに所属している複数の写本と新しく追加する候補となる写本の写本間距離のうち最も近い距離を、新しくグループを構成する基準となる距離として選択する。追加候補となる写本の基準となる距離の中で最も近い距離を持つ写本を新しくグループに追加し、以下同様の手続きを繰返す。これは、最も保守的なグループの構成法であると言え、用いられることの多い群平均法と比較して、相対的にグループを構成しにくい。

参考文献

- [1] 上野英子「源氏物語三条西家本の世界―室町時代享受史の一樣相」武蔵野書院二〇一九
- [2] 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた藤原定家書写資料の調査」情報処理学会論文誌 Vol.59 No.2 315-322 (Feb. 2018)
- [3] 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた日本大学蔵三条西家本源氏物語の調査」人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 Vol.2018 No.1 59-66 (Dec. 2018)
- [4] 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた紅梅文庫旧蔵本源氏物語の調査」淑徳大学経営学部・教育学部研究年報二〇二〇
- [5] 宮川葉子「三条西実隆と古典学」風間書房一九九五
- [6] 金明哲「テキストデータの統計科学入門」岩波書店二〇一一

出典

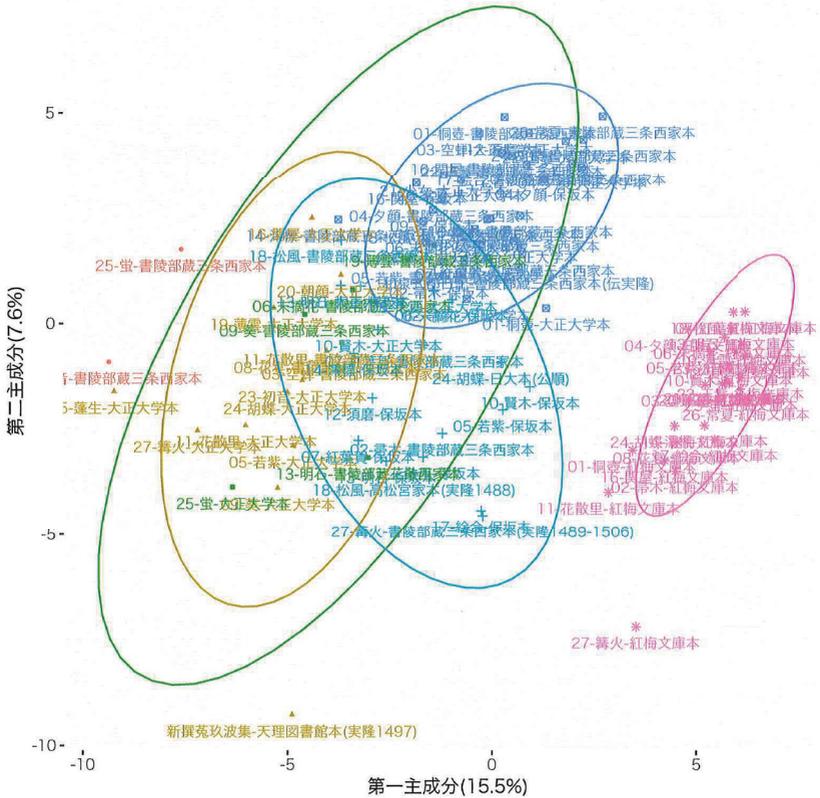
調査対象写本は、出版または画像公開された写本を対象としている。特に書名のない写本は源氏物語を表している。

- ・紅梅本(紅梅文庫旧蔵本) 実践女子大学文芸資料研究所上野英子教授より画像を閲覧させていただいた
- ・書陵部本(書陵部蔵三条西家本) 宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システム
<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000629260000>
- ・保坂本 保坂本源氏物語第一巻〜第四巻 おうふう 1995,1996
- ・大正大学本 大正大学図書館・研究所 源氏物語写本 https://tais.ac.jp/library_labr/library/genji/
- ・日本(日本大学蔵三条西家本) 日本大学蔵源氏物語第五巻三条西家証本 八木書店一九九五
- ・高松宮家本 高松宮御蔵河内本源氏物語第4巻 臨川書店一九七三
- ・和泉式部日記(書陵部蔵三条西家本) 宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システム
<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000613360000?searchIndex=7>
- ・新撰菟玖波集(天理図書館蔵) 天理図書館善本叢書 和書之部第二十巻 新撰菟玖波集 實隆本 八木書店一九七五

巻	紅梅本		書陵部本		大正大学本		保坂本	
	文字数	字母数	文字数	字母数	文字数	字母数	文字数	字母数
01	5688	114	5828	103	5695	109	5857	116
02	5814	116	5876	116	5764	112	5565	105
03	4582	109	4601	116	4566	109	4464	117
04	5341	108	5746	113	5624	104	5568	104
05	5456	112	5414	112	5297	117	5370	114
06	5564	103	5615	113	5623	114	5546	112
07	5835	109	5617	116	5683	107	5762	122
08	5828	107	4046	117	4261	117	4272	109
09	5150	103	5991	113	5805	123	5790	113
10	5710	106	5436	114	5291	125	5563	119
11	1602	103	1542	102	1681	112	1585	105
12	3414	100	5527	106	5072	104	5485	114
13	5939	103	5531	116	5473	118	5738	117
14	5698	111	5826	111	5702	108	5661	117
15			5852	117	5978	113	6012	105
16	1964	102	1943	96	1967	102	1917	100
17	5578	106	5587	103	5535	111	5449	116
18	5488	101	5413	115	5442	113		
19	5187	103	5574	118	5337	114		
20	5431	104	5201	104	5506	107		
21	5582	99	5589	112	5605	111		
22	5278	101	5173	100	4996	102		
23	6077	104	6241	111	6113	119		
24	5729	112	5571	98	5822	117		
25	6394	102	6172	109	5792	125		
26	6018	105	5999	97	5637	115		
27	1343	105	1360	103	1370	102		

表一 調査対象とした写本と文字数
表の上部に源氏物語写本のうち、紅梅本、書陵部本、大正大学本、保坂本を、下部にそれ以外の写本をまとめた。

	文字数	字母数
日大本「胡蝶」	5878	116
高松宮家本「松風」	5282	122
和泉式部日記	6330	110
新撰菟玖波集	6981	139



調査報告 112-3 図1 主成分分析の結果

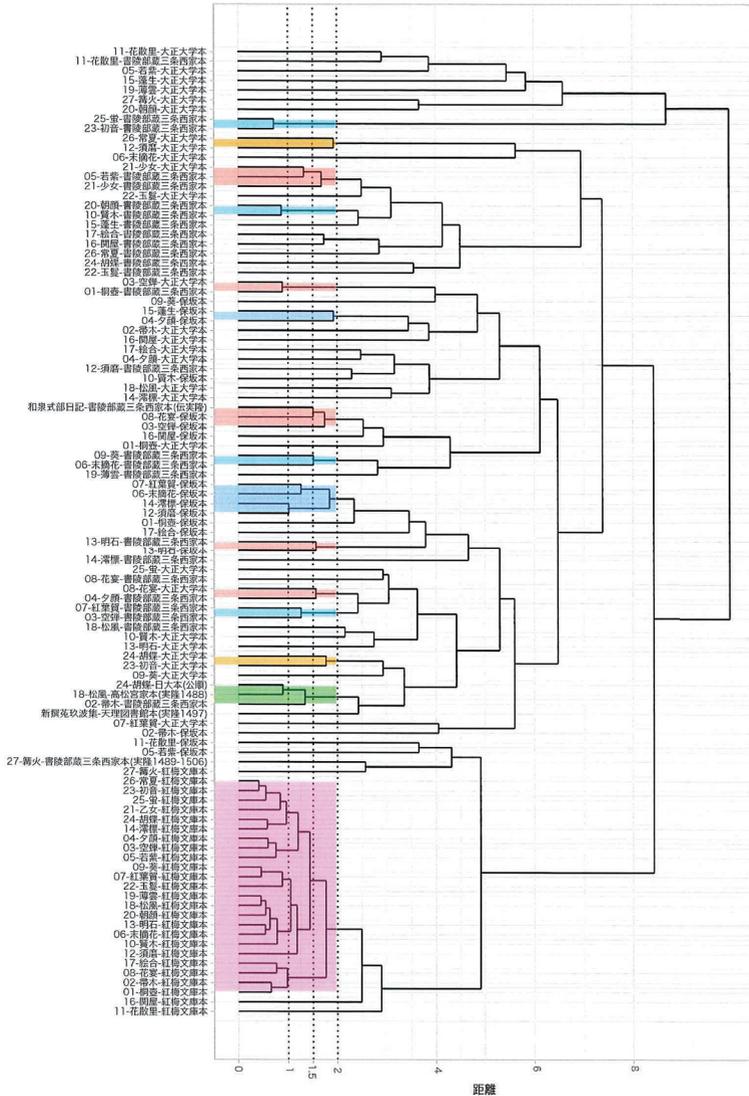


図2 階層的クラスター分析の結果